

21 ナーダ・ブラフマー 宇宙の響き

【全6回】／開催方法：現地

せこやすお
瀬古康雄

シタール奏者
しまねガムラン主宰



受講料 一般料金：¥10,600 早割価格：¥9,600(納入期限：5月9日)

【日程】【全6回】 1回／月 第2土曜日 ※最終日のみ第1土曜日
(5/13、6/10、7/8、9/9、10/14、11/4)

【時間】13:20～14:50

■受講に必要なもの
レジュメ配布

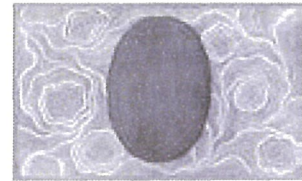
インドではヴェーダ神話の時代からブラフマー（宇宙の神、梵天）を讃える韻律があり、後には、サラスヴァティー（天界のせせらぎ、弁天）という配偶神も生まれて、梵天・弁天による「宇宙の響き」が神殿で唄われるようになった。神像や仏像が作られる時代になると、サラスヴァティーは孔雀を連れビーナと経典を携えた姿となり、日本へは琵琶を奏する弁天様として伝来した。

聖徳太子の『法華義疏』には、「緊那羅は法楽をなし、乾闥婆は俗楽をなす」とある。帝釈天の宮殿で、天女キンナラは聖句を歌い、天人ケンダッパは太鼓をたたいて宇宙の音色を響かせる。法華経に熱心だった宮沢賢治はこの記述を元に、キンナラとケンダッパをユリアとペンベルという名の「すあしのごどもら」とやさしく言い換え、いつも自分と一緒に歩いてくれる「遠いともだち」としている。法華経の時代には天人・天女はもはや神様ではなく、この世に堕ちた六道輪廻の身である。賢治は自分を修羅界に堕ちた者に喩えたが、キンナラとケンダッパは一番上層の天界（帝釈天インドラの宮殿）に住み、賢治の「インドラの網」に童話風に描かれているように、異次元ではあるがこの世の遥か上空を飛翔して宇宙の響きをわれわれ人間に届けてくれている。

ところで、聖徳太子や宮沢賢治が耳にした宇宙の響きとは一体どのようなものだろうか。私のような者にも聞こえるのだろうか。ロジャー・パルバースは宮沢賢治の研究を40年以上も続け、「僕が作品を翻訳する際は、いつもトランス状態に入り込み、賢治に成り切って訳しています」とのこと。そういえば、ブラフマーもサラスヴァティーも出会うためにはトランス状態が不可欠だろう。無心になって、あるいは夢見心地で出会うしかないアナーハタナーダ（聴こえざる音）であろう。「インドラの網」では孔雀の鳴き声や天の太鼓は、確かに響いているものの、また少しも響いていないのですと、微妙な言い回しのつぶやきでアナーハタナーダの不思議が語られている。これを人の耳に聴こえるアナーハタナーダ（聴こえる音）にするのが古典的な韻律や民族音楽の遡源に係る者の務めである。

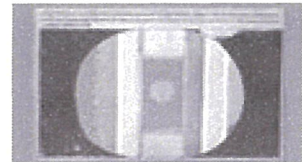
あれこれ思うにつけ、ナーダ・ブラフマーの原点はどのようなものであろうか。ヒンドゥー教の寺院で古伝の韻律の奏上を代々の家業とするインド人の私の友人は、儀式の時の特別な頌（しょう、じゅ）は皆が知っている旧知の歌詞ではなく、その日その時に心に浮かぶ頌を即興で唱えなければならないので、インプロビゼーション（即興性）が不可欠であるという。ナーダ・ブラフマー、「宇宙の響き」は日々新しいということか。そういえば「インドラの網」は朝日を浴びて輝いている。明けない夜はない。宇宙の響きへの興味は尽きない。

本講座ではこれらのことを昔からの音源や映像で紹介し、できればインプロビゼーションを本領とするシタールでも試みに演奏してみたいと思います。



宇宙卵の誕生
(Kangra,18c,Varanasi)

ヒランニヤガルバ（黄金の胎児）が、太初、暗黒の水波の中に自らを出生させた模様が描かれている。



ビンドウ
(Rajasthan,18c.)

宇宙創造の核「ビンドウ（点、しずく）」が成長しはじめる様子。

シタール 曲目

- (1) ラーガ・パイラヴィーラサ（曲調・情趣）：
シャンティ
（平安、静寂、幸福）、
カルナー
（悲しみ、慈悲）
- (2) ラーガ・ゲンカリラサ（曲調・情趣）：
ガンビーラ
深さ、落ち着き、甚深微妙
「深」は「行深」の深

観自在菩薩行深般若波羅蜜多時
(般若心経)

参考書は特に定めませんが、参考文献を適宜提示するとともに、授業で使用したCDやDVDを閲覧可能にします。